

扇^{おおぎ}の的^{まと}（大野恵造^{おおのけいぞう}）

那須^{なす}の 与^よ一^{いち} 朔風^{さくふう}の 海^{うみ}に 馬^{うま}を 進^{すす}む

念^{ねん}ずらく 「南無^{なむ}八幡大菩薩^{はちまんたいほさつ}」

死生^{しせい}を 賭^として 矢^やを 放^{はな}つ

標的^{ままと}は 飛^とびて 中天^{ちゅうてん}に 舞^まう

水陸^{すいりく}の 歓声^{かんせい} 暫^{しばら}くは 止^やまず

解説 源氏と平家が海ぞいで向かい合い、平家は船の上に扇を的として立て、「当ててみる」と挑発します。源氏側の弓の名手・那須^{なすのよいち}与一^{いち}が見事に扇を射ち落とし、敵からも味方からも、称賛されたという詩。

語釈 ※那須与一^{なすのよいち}、平安時代末期の武将・御家人。扇の的を射抜く話が非常に有名である※朔風^{さくふう}北の方から吹いてくる風。きたかぜ。※南無^{なむ}八幡大菩薩^{はちまんたいほさつ}八幡大菩薩に誓っていつわりのないことの意。誓つて、真実、必ずの意に用いる。弓矢八幡。※死生^{しせい}死ぬことと生きること。生き死に。生死。※中天^{ちゅうてん}天のまんなか。天の中心。※歓声^{かんせい}喜びのあまり叫ぶ声。喜びに満ちた声。

通釈 平家の挑発に那須与一は義経に命令され、朔風の中を馬に乗り海に進みます。仏に南無^{なむ}八幡大菩薩と祈り、生死を賭けて矢を放つと、見事、平家が掲げた標的の扇子が天に舞い、平家、源氏の人々は戦いを忘れ、歓声が止まなかった。